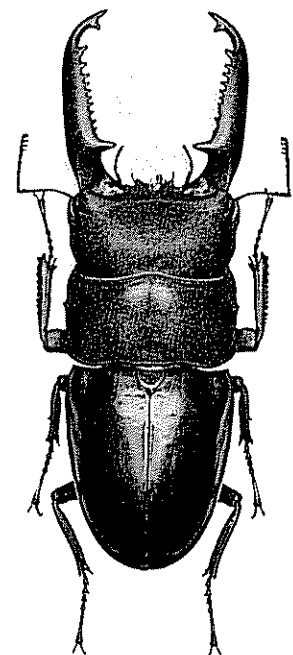
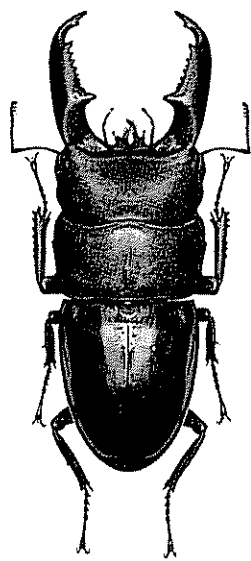


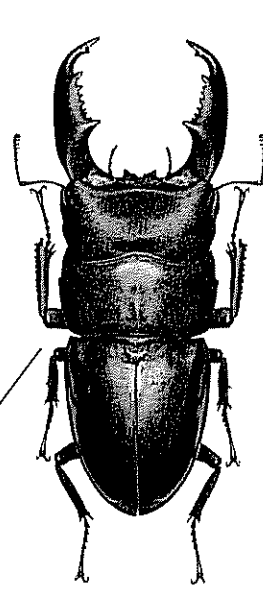
フィリピンの ヒラタクワガタ



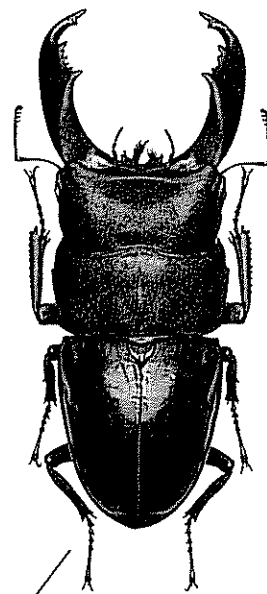
パラワンヒラタ
palawanicus
パラワン島
111.3mm



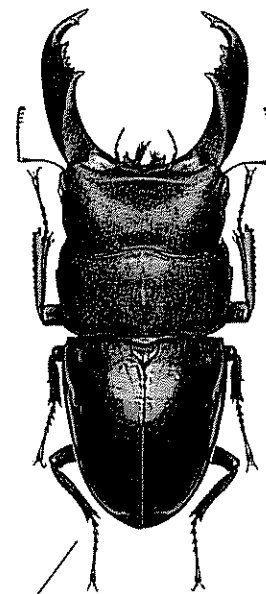
?
titanus?
シブヤン島
87mm



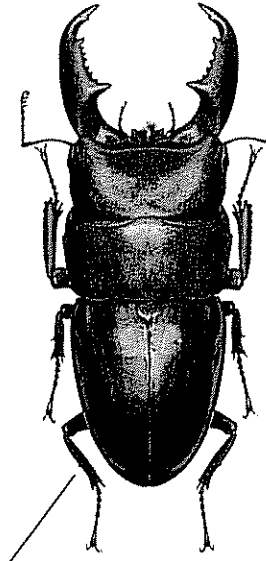
ニシルソンヒラタ
titanus?
ルソン島西部
94.8mm



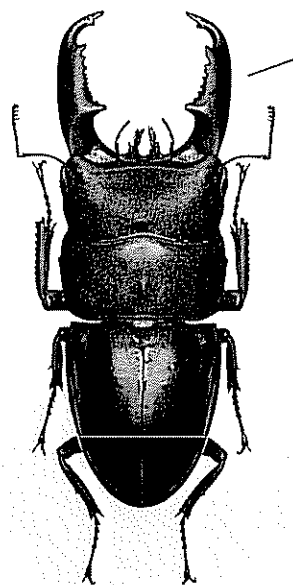
ヒガシルソンヒラタ
typhon
ルソン島東部
103.7mm



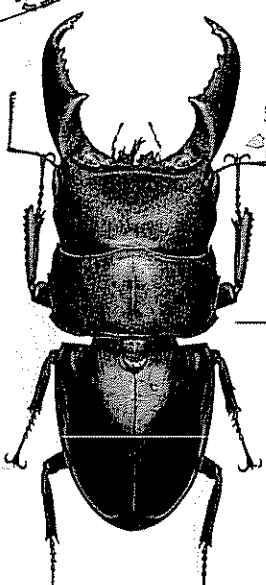
ヒガシルソンヒラタ
typhon
カタンドゥアネス島
105mm



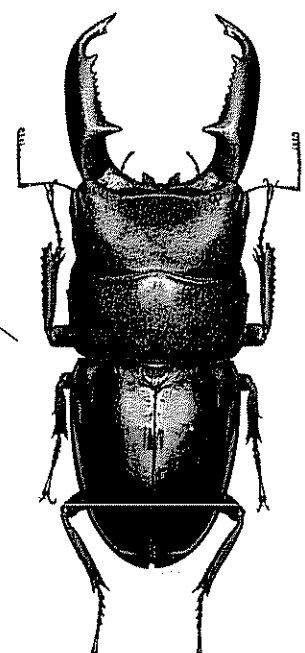
マリンドックヒラタ
titanus?
マリンドック島
94.1mm



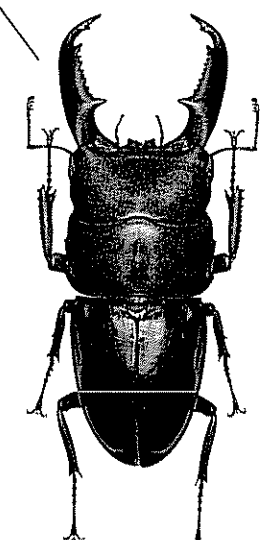
サマルヒラタ
titanus
レイテ島
98mm



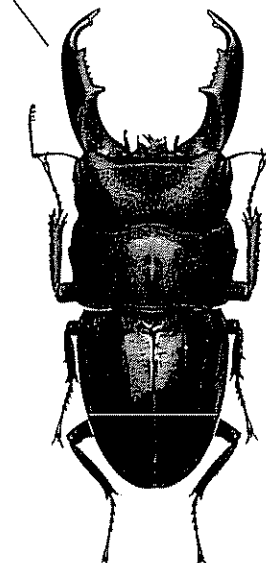
ミンダナオヒラタ
titanus?
バシラン島
102mm



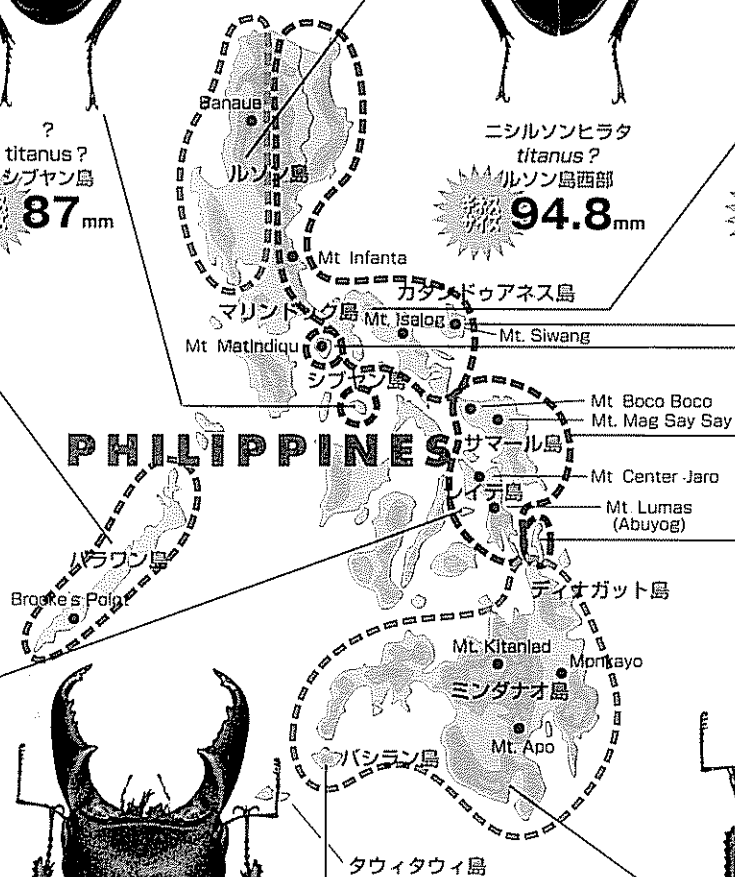
ミンダナオヒラタ
titanus?
ミンダナオ島
103mm



?
titanus?
ディナガット島
86mm



サマルヒラタ
titanus?
サマル島
98.5mm



大小7000といわれる島々から成り立っているフィリピンは、巨大ヒラタの帝国とも言える。フィリピン以外で10cmを超えるヒラタの産地は、スマトラとスラウェシの2カ所のみだが、ここフィリピンでは、11cmを超えるパラワン島を筆頭に、ルソン島、カタンドゥアネス島、ミンダナオ島、バシラン島と5カ所もの「10cm超えヒラタ」の産地が知られている。

フィリピンのヒラタは、北部のルソン島から東にグルリと弧を描くような形で分布しており、西のパラワン島にもポツリと離れて分布している。中央部のミンドロ島、マスバテ島、バナイ島、ネグロス島、セブ島、ボホール島などからは確実な記録がなく、なぜか空白地帯となっている。

ルソン島のヒラタの変異は複雑で、フィリピンのクワガタムシに詳しい小森祐氏のご教示によれば、島の中央を走る山脈によってヒラタの産地は分断されており、島の西部には内歯が下につく型、島の東部には内歯が上につく型が棲み分けていて、境界の一部混生地では両方の型が混じってくるという。カタンドゥアネス島のヒラタは内歯が上がる特徴が安定しており、ルソン島東部の個体群に非常によく似ている。この産地のものは、スラウェシのパロパバルのヒラタを、大あごはそのまま、体をより幅広くしたような迫力のある個体群で、「ティオウヒラタ」という通り名がある。

ルソン島の南部にあるマリンドック島のヒラタは、大あごが太短く、体の幅が広いことから、重厚感があって人気が高い。

シブヤン島産は87mmの1♂を見ただけだが、マリンドック島産を細長くしたような個体であった。

サマル島とレイテ島産は、ルソン島のものに似ているが、大あごの内歯は、下につくものから上につくものまで色々な型が出現するようで安定していない。

ディナガット島産は86mmの1♂を見ただけだが、シブヤン島産に似ている。

ミンダナオ島産の個体は多数の標本と生体が日本に入ってきているが、比較的安定した特徴の個体群で、大あごの内歯は中央より下についている。パラワン島のヒラタの大あごを短くしたような特徴を持つ。

バシラン島産はミンダナオ島産によく似ている。パラワン島産は大あごが長く伸びることで他の産地と区別しやすい個体群で、palawanicusという亜種名がついている。最大個体の体長は11cmを超える、世界最大のヒラタクワガタである。

フィリピンのヒラタは、パラワン島のもを除けば、ルソン島西部、ルソン島東部+カタンドゥアネス島、サマル島+レイテ島、マリンドック島、ミンダナオ島+バシラン島の5カ所に細分できそうで、シブヤン島とディナガット島については、検討した材料が少なすぎてなんとも言えない。タウイタウィ島産のヒラタは見えていないので、形態は不明。